

(口絵解説)

タイにおけるラン切り花の輸出防疫処理

はじめに

現在、日本には年間およそ1.2億本のラン切り花が輸入されているが、その約90%をタイ産が占めていて、両国にとって重要な植物となっている。生花の性質上、迅速な輸入植物検疫が要請されるが、病害虫の付着問題のため、検疫作業には時間と労力がかかり、一定の時間が経過する。日本でのその期間が欧米より若干長いため、タイの輸出業者は日本より欧米向けを好む傾向もある。また、栽培者は厳密な日本の検疫内容を予測した病害虫管理(薬剤の予防散布)を実施しており、輸出業者の処理とともに、その内容は種々の問題をはらんでいる。

山口大学農学部はカセサート大学農学部との学術交流計画の一環として、平成4年度から3年計画で、「タイの輸出園芸植物、とくにランの総合的管理に関する共同研究」を実施した。各地の栽培施設で園芸学、昆虫学、植物病理学の面から調査を行ったが、ここでは、輸出前処理の概要を記したい。以下の記述はBangkok Flowers Centre社(以下、BFC)におけるものである。

ランの輸出前処理

集荷: 契約栽培施設からの切り花を積んだトラックは午前10時ごろから午後にかけて到着する。栽培者により通常super long, long (medium), shortの3段階に規格分けされ、10本1束になったランは、細長い木箱に入り、少し湿らせた厚い布でおおわれ到着する(口絵写真①)。この集荷車は近くからの場合は温度調節はなく、2時間程度以上かかる場合は9°Cで運ばれる。圃場で切ってからBFCに到着するまでの最大所要時間は4時間程度である。なお、同社で扱う切り花はデンドロビウムが主で、次いでパンダやオンシジウムが少し入る。

上記3段階は主としてデンドロビウムの場合で、その内容はデンドロビウムでも品種により違うが、長さ、花数、開花している花数の順で記すと、super long (55 cm以上、16個、6個)、long (45~54 cm、13~15個、5個)、short (33~44 cm、7~12個、4個)である。

選別: 木箱から出した花は(同②)、通常水を入れたトタンのトレイに立てて仮置きするが(同③)、その際に基部を少し切り、水上げをよくする。特にsuper longの場合が多い。BFCでは入荷記録とともに必要に応じてさらに規格分けを行う(同④)。花がぬれている場合、天井の扇風機により3時間ほど乾燥させることもある。

くん蒸: 次にトレイに入れ、くん蒸室で臭化メチルによる2時間のくん蒸を行う(同⑤)。到着してからくん蒸

室に入るまでの時間は通常1~2時間である。ヨーロッパ向けの場合は、このくん蒸を行わない。

予冷: 次に保存液に浸した脱脂綿で10本1束の基部を包み、上部を開けた小型のポリ袋に入れたあと、湿度90%、12°Cの低温室に入れ1晩置く(同⑥)。

包装: 予冷のあと24°Cの部屋に移し、必要に応じてさらに選別した後、1束ごとに乾燥吸着剤と細く切ったクッション用紙片と一緒にポリ袋ないし薄紙で包む(同⑦)。薄紙のうえにさらにポリ袋に入れる場合もある。この吸着剤は前記の臭化メチルと輸入国で予想される検疫用薬剤を吸着させる目的をもち、カルシウム粉末を練って成形乾燥させたものである。この乾燥剤を過マンガン酸カリの溶液につけて乾燥させ、数個の穴を開けた小型ポリ袋に入れたものを1束に1袋あて入れる。

Super longの場合は、1束が入った上記の袋を5個、その他のサイズでは6個をダンボール箱につめ、その箱をさらにまとめて大型ダンボール箱に入れる。

貯蔵: 上記の大型ダンボール箱を10°C以下の低温室で貯蔵する。その時間は輸出用の航空便に応じて違いますが数時間から1晩程度である。

出荷・輸出: 貯蔵室の小さな積出し口から運び出した箱は、12°Cの低温車でバンコック空港に向かう。

その他: 予冷で小型ポリ袋に入れる段階で、業者によっては1本ごとに水の入った小型プラスチック管に入れることもある。

前記したとおり、栽培者の予防散布が徹底しているため、BFCに到着した切り花に生きた昆虫が付着していることはまれで、さらに、くん蒸処理を行うので、BFCの切り花に関しては輸入国の検疫で生きた昆虫が見いだされることは少ないと思われる。

一方、臭化メチルくん蒸によって植物体表面の病原体は死滅するが、ウイルスなど植物体内に存在する病原体はその影響を受けないと考えられる。今回の調査で、タイ各地のラン栽培園でウイルス病の発生が確認されたが、ウイルス感染植物のうち、症状の軽い場合は見落とされ、健全植物に混じって輸出されている可能性が十分考えられる。切り花は輸入国内で直ちに消費されるので、切り花とともに侵入したウイルスがその国に定着し、ラン栽培に問題をもたらす確率はきわめて低いと思われるが、注意は必要であろう。この点に関しても、タイにおけるランの栽培管理技術や輸出時の監視技術の改善・強化が望まれる。

(山口大学農学部 矢野宏二・濱崎 詔三郎・田中秀平、カセサート大学生物的防除研究センター バンポット・ナボンベ)